ELEC NEWSLETTER

ELEC同友会
ELEC FRIENDS ASSOCIATION

No. 27
February 1987

国際化の視点

木田　宏　日本学術振興会理事長

国際化の新潮流

今日，〝国際〟と言う時，かってのように国と国との触れ合い，システムとシステムとのぶつかり合いという段階を遙かに超えて，そこに働いている人や物が，現実の国や民族という生活圏，国境という境界線を越えて，凄まじい勢いで動き回っていることから生じてくる新しい状態を指すと言えます。このような人間の行動範囲が広がったことによって，地球の資源を皆で共有していかなくてはならないという現象が起こり，このことから新たに〝国際化〟の意味を考える必要が出てまいりました。

人や物の動く頻度が多くなり，また時間的にも短くなることによって地球社会が小さくなると，これまで国境の内だけの問題であった事柄が，それこそ海底から宇宙というように大きな範囲に渡った問題となって，我々の生活に影響を及ぼしてまいります。こうして，総べての社会のシステムについて国と国とを越えて，互いに協力していかなければならないという現象が一段と高まってまいりました。

このような時代に，21世紀の国際社会がどうしたらうまくいくかということは，関係者が皆頭を悩ませているところです。国際的な機関がなくてもやっていけるという社会ではなくなっているのです。こういう前提のもとで，国連諸機関を初めとして，EC，ASEANに代表される地域の政府間の組織，美術，スポーツなどの民間組織など，あらゆる段階において世界との繋がりが拡大してきていることが，今日の国際化を考えていかなければならない側面の実態であると言えます。

知的認識を広げる

このような国際化に対応するには，国際化の現実について知識を持っている必要があります。ところがこういうことについてどれだけの人が知識を持っているかというと，極く少ないのです。

例えば，豪州の人の持っている日本に対する関心と，我々日本人の持っている豪州に対する関心には，これほどの違いがあってよいのかと思うほど大きいのです。いまや豪州は，イギリスとの取引きより日本との取引きのほうが遙かに大きいのです。ですから豪州やニュージーランドでは第一の外国語が日本語になっています。そうでないとこれからの生活がうまくいかないと思っているのです。それに対して，日本は我々に顔を向けてくれないではないか。西や東の，しかも遠くの方を向いていて，南へは向いてくれないではないかと文句を言われるわけです。

日本の貿易相手はアメリカが第一ですが，それと同じ大きさをアジア・中近東の国々が引き受けてくれています。これに対して我々の認識はどうかと言えば，石油を輸入している国に対しては石油しか見えない。人間が見えないのです。こういう認識では大変心寂しい。隣りの民族がどういう動きでどうなっていて，そこにどんな生活があるかという認識を持っていなければいけないのではないかと思うのですが，このような知的認識が十分に今日の国際化の状態に対応できているかと考えますと，私は非常に不足していると考えざるを得ないのであります。

付き合うこと

国際化に対応するために，まず〝付き合う〟という姿勢を広げることが大事だと思います。人が付き合って話をしないと外交も商売もできません。そして，付き合うことのスタートは，実は人間から始まるのです。

日本人は長い島国生活のせいもあり，グループの中での付き合いは上手であっても，違ったグループとの間の付き合いはうまくいきません。これは教育の課題，政策の課題として大いに考えなければならないと思います。

戦前は，隣りの学校の生徒とは遊ばないように，同じ学校であっても上級生や下級生とは付き合わないようにと，先生から指導を受けました。あくまでもクラスの内から出てはいけないということです。外の人は全く他人であるから付き合う必要はないということです。私は国際化を考える場合，ここを考え直さないと，具合が悪いであろうと思います。学校の先生方にお話する時は，先生方は，他の学校の先生と，他教科の先生と，他の社会の人とお付き合い願えませんかと言っています。

自己主張をすること

人と付き合う時に大事なことは，自己紹介ができるということです。「私は誰々です」という自己紹介ができて，「こういうことでお付き合いしましょう」という自分の特技が相手に説明できなければ本当の意味のお付き合いはできません。その意味で〝国際化する〟ということは，自分を知ること，日本を知ること，そして自分を説明することなのです。

相手に対して自分がどう役に立つ人間であるかということを分からせなければ，付き合ってもらえません。相手も人間ですから無駄な時間を過ごしたくないでしょう。日本がよその国から付き合ってもらえるのは，お金があるからです。しかし，こういう付き合いだけでは寂しいですね。お金がなくても付き合ってもらえるように，本物の自分を磨いておかないと，本当の意味では付き合ってもらえないのです。

さらに，相手の主張に対して自分の考えを十分に説明して，納得させる能力が必要です。「反論すると和が壊れるから，しない」「黙っていても分かるはずだ」というのでは，違った世代、違った国の人と付き合う時にはうまくいかないのです。自分とは何かが分かっていて，相手の人が，あの人とは付き合っていると楽しい，世界が広がると思い，尊敬する，そういう人間に育っていかなければならないと思います。このことは，日本人にとっては相当意識した努力が必要であろうと思います。今までの環境の中で，このままの惰性で良しとしていますと，このような態度はなかなか出てこないのです。

隣人の言語を知ること

自分を相手に知らせるために，言葉は基本的なものです。技術としての言葉を育てること，その技術を錬磨することは大事ですが，同時に相手の言葉を理解する努力をしなければいけないと思います。

また，日本の活動範囲が広がっていますから，日本語で相手とコミュニケートできるように，日本語を相手に使ってもらう努力をすることも必要でしょう。

付き合う態度が大事だ

もう一つ大事なことは，付き合う態度です。相手の国の悪口を言ってはいけないという簡単なことが大事だと思います。付き合う相手には，いろいろなプラス・マイナスがあるでしょうが，「他国の人の悪口を言うな」と，ロゲンドルフ神父は『異文化のはざまで』の中で書いておられます。

お付き合いする時には，お互いに共通の部分を広げていこう，違いを強調することは後回しにしよう。そして願わくば算盤勘定でなく，事柄の論理で，その上に愛情を持って付き合おう。相手に迎合するばかりでは駄目ですよと，戦時中から日本に住み，日本人をよく知っておられたロ氏だからこそ言えるのではないでしょうか。

この本を読みながら，日本社会にあるウチとソトという考え方をできるだけ薄めていく必要があるのではないかと思いました。ある程度の使いわけはやむを得なくても，中曽根首相の例にあるように，あまり公に言ってしまったのでは，まずいのであります。

隣人との付き合いから始まる国際化

こう考えていくと，〝国際化〟という問題は決して遠い国のことではないのです。お隣りの家庭，お隣りの人，行きずりの人との付き合いを深めていく努力が上手にできる方，人のお世話も上手にできる方であれば，どこの国の人とも上手に付き合えるようになると思います。つまり，自分の日常の世界で，隣り近所の人々，違った世代の人々，違った職業の人々と気持ち良く付き合っていける，そして相手のいいところを見ながら，だまされないように，あるいは色メガネだけで相手を見ないようにする，何が本当のエッセンスであるかを見る目を磨き，自分が相手に期待され，信頼されるようになること，これが国際化の要点ではないかと考えております。

（1986年11月１日，ELEC英語教育研究大会における講演の要旨）